

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

How to incorporate frequency data from corpus
into dictionaries : in the case of attributive and
predicative adjectives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 純一, Murata, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/923

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



辞書記述におけるコンピュータ コーパスデータの扱い

——形容詞の限定・叙述用法について——*

村田 純一

1. はじめに

近年、言語研究においてコンピュータコーパスの利用が一般的になってきており、辞書記述においても以前とは比較にならないほど、客観的な記述が可能になっているといえる。一方、具体的に数量化されたデータをどのように解釈し、それを辞書の記述に反映させるかについてはあまり詳しく議論されてはいないようである。

本稿では形容詞の限定・叙述用法について的を絞り、コンピュータコーパスデータをどのように利用すべきかを論じていく。議論の構成としては、第一に主な文法書における各用法の定義や扱いを明らかにし、次に、いくつかの辞書における具体的な形容詞の各用法の扱いを比較検討したうえで、BNC (British National Corpus) における形容詞の用法を分析して、辞書・あるいは文法書の記述の妥当性を検証し、最後により望ましいコーパスデータの頻度数などの扱いについての提案をする。

2. 形容詞の限定・叙述用法

一般に、形容詞の用法は機能から見て限定用法（形容詞+名詞）と叙述用法（beなどの連結動詞+形容詞）に分けられる。Quirk et al. (1985) は両方の用法が可能なものの、たとえば、hungry, infiniteなどを中心的形容詞 (central adjectives) と呼び、afraid, asleep, utterなど片方のみが許され

るものを周辺的形容詞 (peripheral adjectives) と呼んでいる。では、周辺的形容詞のうち、限定用法のみが許される形容詞や叙述用法のみが許される形容詞とは具体的にどのような特徴があるのだろうか、また、どれほどその制限が強いのであろうか。以下では、まず、この両用法についていくつかの文法書などを概観する。

Bolinger (1967) は、まず第一に、叙述用法が (1a) のように temporary (一時的) であるのに対して、限定用法が、(1b) のように、non-temporary (非一時的) であるという特徴を指摘する。

(1) a. The girl is faint.

b. the foolish girl

次に修飾 (modification) を指示物修飾 (referent-modification) と指示修飾 (reference-modification) に分類して、限定用法と叙述用法とに関係づける。Bolinger 自身はその 2 種類の修飾の正確な定義を明らかにしていないが、安井他 (1976) の定義に従うと、指示物修飾は名詞が表す指示対象を直接的に特徴づけるのに対し、指示修飾は名詞によって表される概念の適用を、一定の特徴的な性質を持つ部分集合に限定する機能を持つ。そして、叙述用法が (2a) のように指示物修飾であるのに対し、限定用法が (2b) のように指示修飾機能を持つとする (Bolinger 1967, p.15)⁽¹⁾。

(2) a. The lawyer is criminal. (その弁護士は犯罪的だ)⁽²⁾

b. a criminal lawyer (刑事専門の弁護士)

ここで注目すべきは第一に criminal のように、同じ形容詞でも語義によって用法が異なる場合があることである。あくまでも議論を、ある単語のある語義に関する限定用法または叙述用法への制限、について絞る必要がある。

従って、例えば (2b) の場合の *criminal* は「刑事専門の」という意味で、この意味の場合は限定用法のみの形容詞であって、それを (2a) のように、叙述用法で用い、「その弁護士は刑事専門である」という意味で用いることは通例はないということである。ところが、Bolinger は指示修飾に対しても、ある種の叙述的な基盤を作り出すことが可能である (if we are determined to do so, we can manage some kind of predicative foundation for reference modification (p.15)) として、その一つに (3) のような、定義とほぼ同じような叙述形式や、(4) のような名詞の代用、(5) のような名詞・代名詞の省略のような例を示している。

- (3) A lawyer can be criminal, civil, constitutional...
- (4) Is John an insurance agent? -- No, he's commercial.
- (5) The agents in this building are mostly theatrical (ones, agents).

これらの例は指示物修飾とは言えない点においてむしろ限定用法の異形と呼ぶ方が適切かもしれないが、統語上は叙述用法である。また、辞書や文法書で限定用法のみとされている形容詞もこのような例がコーパスデータなどでどれほど存在するのか興味深いところである。

いずれにしても、Bolinger は指示修飾のみの形容詞を以下のように分類している (p.19)。

1. 名詞が指示するものを同定するもの：

a true poet, a regular champion, etc.

2. 限定詞の the を強調すると呼べるような形容詞：

a) 既に決定されているという意味の the :
the very man, the particular spot, etc

b) 重要性という意味の the :

their main faults, our prime suspect, etc.

c) 認められたという意味の the :

the lawful heir, the rightful owner, etc.

3. 基底構造の動詞の時制を限定する :

the future king, a sure winner, etc.

これは限定用法に関する先駆的な分類として重要ではあるが、指示修飾と限定用法の関係があまり明確でなく、この分類が限定用法のみの形容詞についての分類かどうかは判然としない。⁽³⁾また以下で取り上げる分類的形容詞への言及がなく、網羅的とは言えない。さらに叙述用法のみの形容詞に関する直接的な言及も見あたらない。

安井他 (1976, p.74) は、限定用法に用いられる形容詞はおおまかに次のように分類できるとしている。

(i) 分類的形容詞

(ii) 特性記述的形容詞

i) 制限的形容詞

ii) 状態記述的形容詞

(iii) 同定の形容詞

i) 完全同定の形容詞

ii) 部分同定の形容詞

(iv) 強意の形容詞

i) 名詞強意の形容詞

ii) 限定詞強意の形容詞

この分類は、叙述用法が普通である特性記述的形容詞を含めていることから明らかのように、限定用法のみの形容詞についての分類ではない。また、Bolinger (1967) では直接言及のない「分類的形容詞」という概念が現れていることが注目される。「分類的形容詞」は安井他 (1976) によれば、rural policemen, English girls, criminal lawyers などに見られる形容詞で「主

要語の名詞によって表される概念の適用を一定の部分集合に限定する機能を持ち、主要語の名詞が持つ内在的意味特性に対しては、何ら制限を加えない」としている(p.75)。この定義は上で見た指示修飾の機能の定義とほぼ同じであるが、指示修飾の働きをするものの中に、分類を表す形容詞や、同定を表す形容詞、時間関係を表す形容詞などが含まれるとする(p.83)。

叙述用法のみの形容詞に関しては、a-のつく形容詞(asleep, awakeなど)、補助部をとる形容詞(unable, eagerなど)としているが、後者の条件を満たしても限定用法に用いられる形容詞(equal, inferiorなど)が多いので、決定的な規準とは言えない。

Quirk et al (1985)は、多くの形容詞は中心的形容詞で限定・叙述用法のいずれも可能だが、周辺的形容詞(peripheral adjectives)は限定用法か叙述用法のどちらかに制限されるとしながら、それは常に絶対的とは言えず、話し手によって異なる場合もあるとしている(p.428)。それでも、限定用法に(ほぼ)制限される形容詞を以下の4つに分類している。

1) 名詞の意味を強めるために用いる場合:

a true scholar, a complete fool, etc.

2) 名詞の指示を制限する形容詞:

a certain person, his chief excuse, etc.

3) 副詞と関連付けられる形容詞:

my former friend (-- formerly my friend),

the present king (-- the king at present), etc.

4) 名詞と関連付けられる形容詞:

an atomic scientist (-- a scientist specializing in the theory of atoms),

a criminal lawyer (-- a lawyer specializing in cases of crime),

etc.

一方叙述用法に（あるいはほぼ）制限される形容詞は、一時的であるかもしれないのような状態に言及する傾向があり、生物の健康状態に言及する ill, well, faint, unwell などが代表的であるとする。また、補部を必要とする形容詞も叙述用法に制限され、例として able, afraid, conscious がある。また接頭辞の *a-* がつく形容詞のほとんどは叙述用法であるとしている (pp.432-34)。

Collins Cobuild English Grammar (1990) では、まず形容詞全般を、ある人や物がもつ性質を特定する「質的 (qualitative) 形容詞」と、ある人や物をある分類の一員として特定する「分類的 (classifying) 形容詞」に分けて、限定用法に（ほぼ）制限される形容詞のほとんどは後者の分類的形容詞で、限定用法のみに用いられる質的形容詞は以下に挙げるようなわずかな数に限られるとする (p.71)。

adoring, belated, chequered, choked, commanding, fateful, flagrant, fleeting, knotty, paltry, punishing, ramshackle, scant, searing, thankless, unenviable

また、上で挙げた Quirk et al (1985) の 1) に相当する「強調的な (emphasizing) 形容詞」や、2), 3) に相当する「限定詞後要素 (post-determiners)」は、first, next, same など、名詞が指示しているものをより正確に表す形容詞であるが、その名が表す通り限定用法であるとする。一方叙述用法については前置詞句が後続するものとしているが、Quirk et al (1985) の補部を必要とする形容詞と同様といえる。

Declerk (1991) は限定用法のみの形容詞は以下の 9 分類あるとし、いずれの形容詞も段階性 (gradable characteristic) を持たない点に注目している。

1. -ly という接尾辞をもち、時を表す：
weekly, monthly, daily, etc.
2. 材料・材質を表す：
plastic, wooden, iron, etc.
3. 方角・方向：
northern, eastern, southern, western, etc.
4. 比較級の形式：
former, latter, inner, outer, upper, etc.
5. 副詞的意味合い：
a hard worker (work hard), a new student (who have newly arrived)
6. 名詞句の指示のスコープを制限する (limiter adjective) : certain, chief, favorite, main, only, particular, prime, principal, same, sole, specific, etc.
7. 強調 (intensifiers) : complete, definite, exact, mere, outright, perfect, plain, real, total, true, etc.
8. 分類的形容詞 (classifying adjectives) :
polar, musical, criminal, chemical, medical, solar, social, atomic, etc.
9. その他 : live, average, contemporary, joint, spare, various, etc.

叙述用法については接頭辞の a- がつく形容詞とその他に分けている。

この他, Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) は, Bolinger (1967) の分類を利用して, reference adjectives (指示形容詞) という概念を用い, 限定用法のみの形容詞を以下のように分類している。

1. very, same など既に限定された主要部名詞をさらに指示するもの。

2. main, chief など主要部名詞の重要性やランクを示すもの。
3. lawful, legal など主要部名詞が法律・習慣で認められているもの。
4. medical, atomic など名詞そのものが指示するものを特定するもの。
5. former, present など名詞の時間的な言及をするもの。
6. southern, urban など名詞の地理的な言及をするもの。
7. total, mere など強調的なもの。
8. sole, only など主要部名詞の唯一性を表すもの。

一方叙述用法については 3 分類 (1. 接頭辞の a- がつく形容詞, 2. 健康状態を表す形容詞, 3. 前置詞句が後続するもの) にしている。

以上のように、様々な分類を見てきたが、限定用法の場合、文法家によって下位分類は統一がとれておらず、意味的な分類と機能的な分類が混在している。また、最も大きな問題点は、ある形容詞が、限定用法のみの形容詞かどうか判断する決定的な規準はないということである。Declerk (1991) や、Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) は限定用法のみの形容詞を分類してはいるが、基本的にはいくつかの例を挙げただけである。確かに強調的形容詞や限定詞後要素は数が少なくいわゆる closed-class であり、限定用法のみの形容詞として確定することができそうであるが、分類形容詞は open-class である。そして、すべての分類形容詞が限定用法ではないことは、たとえば male, female など分類形容詞の典型とも言える形容詞が叙述用法がごく普通であることからすぐにわかることがある。さらに限定用法のみとされる、一部の質的形容詞の場合は判断のしようがないと言わざるを得ない。結局のところ英語学習者にとっては辞書などに頼る他はないということになりそうである。

また、大きな問題として残ることとして、どの程度まで限定用法にあるいは叙述用法に制限されるのかが判然としていないことがある。完全にどちらかの用法に制限される形容詞があるのだろうか。上で見た Quirk et al

(1985)の指摘にあるように、話し手による差や、Biber et al (1999) にあるように、「周辺的な形容詞はどちらかの用法に偏りがあるが、時としても一方の用法でも現れることがある (p.507)」というのが妥当な結論のようである。このことを確かめるには実際のコーパス例を参考にすることが考えられるが、その前に、コーパスを利用しているとされるいくつかの辞書がどのように記述しているのかを見ていくことにする。

3. 辞書の記述

英語を第二言語あるいは外国語として学ぶ学習者に定評があり、コーパスに基づいているとされる3つの辞書、すなわち *COBUILD* (2001), *OALD6* (2000), *LDOCE* (1995) を取り上げることにする。

それぞれの辞書の限定・叙述用法に関する説明部分を以下に示す。

COBUILD (2001, p.xxv)

ADJ n The adjective is always used before a noun.

usu ADJ n The adjective is usually used before a noun. It is sometimes used after a link verb.

v-link ADJ The adjective is used after a link verb such as *be* or *feel*, ... Adjectives with this label are sometimes used in other positions such as after the object of a verb such as *make* or *keep*, but never before a noun.

usu v-link ADJ The adjective is usually used after a link verb. It is sometimes used before a noun.

OALD6 (2000, B5)

Some adjectives, or particular meanings of adjectives, are always used before a noun and cannot be used after a linking verb. These are labelled [only before noun]. The label [usually

before noun] is used when it is rare but possible to use the adjective after a verb.

Adjectives labeled [not before noun] are used only after a linking verb, never before a noun. The label [not usually before noun] is used when it is rare but possible to use the adjective before a noun.

以上のように *COBUILD* (2001) と *OALD6* (2000) は若干の差はあるものの、ほぼ同じ説明で、限定用法・叙述用法をそれぞれ二つ、すなわち、「常に (always)」と「通例 (usually)」に区分している。*LDOCE* (1995) は、上の二つの辞書と比べると限定用法・叙述用法についての詳しい説明ではなく、単に、[only before noun] と [not before noun] という表示とその例が示されているだけである。⁽⁴⁾ここで注意すべきは、「常に (always)」は100%と解釈して良いが、「通例 (usually)」とはどの程度のことを表しているのかが明確でないことである。

それでは、個々の形容詞についての限定用法・叙述用法の判断が各辞書でどのようにになっているのかを表示を頼りに確認していくことにする。調査する形容詞は主に文法書で限定用法あるいは叙述用法とされているものの中から無作為に選んだものである。また、2節で述べたように、多義語はその意味によって用法が異なる場合があるので調査からはできる限り除いた。⁽⁵⁾また参考のために2つの英和辞書（コーパスを利用したとするジーニアス英和大辞典 (2001), コーパスの利用には特に言及のない新グローバル英和辞典 (2001)）の表示を加えておく。

	<i>COBUILD</i>	<i>OALD6</i>	<i>LDOCE</i>	ジーニアス大	グローバル
限定用法					
<u>atomic</u>	usu ADJ n	usu before N	*	通例限定	*
<u>cardiac</u>	ADJ n	only before N	only before N	限定	限定

chief	ADJ n	only before N	*	限定	限定
countless	ADJ n	usu before N	*	通例限定	*
<u>former</u>	ADJ n	only before N	only before N	通例限定	限定
<u>main</u>	det ADJ	only before N	only before N	限定	限定
<u>mere</u>	ADJ n	only before N	only before N	限定	限定
rural	ADJ n	usu before N	*	通例限定	普通限定
scant	usu ADJ n	only before N	only before N	通例限定	*
sheer	ADJ n	only before N	*	限定	限定
total	usu ADJ n	usu before N	only before N	通例限定	*
wooden	ADJ n	usu before N	*	通例限定	主に限定
woollen	usu ADJ n	usu before N	only before N	語義 ¹ 通例限定 語義 ² 限定	語義 ¹ * 語義 ² 限定

叙述用法

<u>afraid</u>	v link ADJ	not before N	not before N	叙述	叙述
<u>asleep</u>	v link ADJ	not before N	not before N	叙述	叙述
<u>awake</u>	v link ADJ	not before N	not before N	叙述	叙述
grateful	usu v link ADJ	*	*	語義 ¹ 語義 ² 限定	語義 ¹ 叙述 語義 ² 限定
penniless	usu v link ADJ	*	*	*	*
thankful	usu v link ADJ	not usually before N	not before N	語義 ¹ 通例叙述 語義 ² *	*

注 1. *は表示無し、下線は（ほとんど）全ての辞書が判断の一一致した語を表す。

2. 多義語の場合は形容詞の主要な意味についての表示をあげている。

3. main の det ADJ は限定詞の直後に続く形容詞で、限定詞後要素 (postdeterminer) と同義。

この表から指摘できることの第一は辞書の判断が異なる場合が多い点である。概して *COBUILD* は制限が厳しく、*LDOCE* は制限が少ないと言える。*OALD6* は中間的で、*COBUILD* が usu を付けずに常に限定あるいは叙述用法としている単語に usu を付けることが多い。

この差は何から生まれるのか。その原因としてはいくつか考えられる。第一に、3つの辞書すべてコーパスデータに基づくとしている以上、コーパスの差による可能性がある。いずれの辞書も大規模コーパス (*COBUILD* は The Bank of English, *OALD6* は Oxford Corpus Collection と BNC,

*LDOCE*はLongman Corpus Network)を用いているが、大規模コーパスにおける言語データの差が指摘されることはよくあることである。しかし、ここで取り上げている形容詞はかなり頻度が高いものが多く、大規模コーパスによる言語データの違いとは考えにくい。

第2に考えられる原因は、限定用法、叙述用法の判断基準に関する辞書による差である。たとえば、*COBUILD*の場合、usuを付けずに常に限定あるいは叙述用法としている単語に*OALD6*ではusuを付いていることが多いが、これは用例の一定の比率、例えば100%ではなくても、99%が限定用法であれば〔常に限定〕それ以下で90%以上であれば〔usually before noun〕とするというような規準を定めていることが推測できる。いずれにしても、どの辞書にもそのような詳しい判断基準は示されていない。

最も単純な原因として考えられるはデータの見落としである。たとえば辞書によって「常に」と「通例」という異なる判断がある場合、常識的に考えるなら、「通例」の方が正しい、あるいは妥当と言えるだろう。なぜなら、「通例」という判断は、そうではない例を確認したからであり、「常に」はそのような例を確認できなかったと言えるからである。

辞書の表示の差の原因が何であれ、このような差は辞書の利用者からすると大きな問題といえるのではなかろうか。

次に、上記の表から指摘できることとして、ここで検討した全ての辞書が一致して「常に限定」あるいは「常に叙述」としている語は7語で、その他は「常に」という判断は避けている。これから、「常に限定用法」あるいは「常に叙述用法」の形容詞は決して多くはないと言えそうである。これは2節の結論と一致していると言えよう。しかしながら、少なからず存在するのも事実である。それではどのような形容詞が「常に限定」あるいは「常に叙述」と言えるだろうか。少なくともこの表から判断する限り、1節の分類法を踏まえるならば、former, mainが限定詞後要素(postdeterminers)であることから限定詞後要素が一般的に「常に限定」言えそうである。尤も、

これはそれらの語を分類する *postdeterminer* という名称自体がそのことを表しているので当然といえば当然のことではある。また, *mere*, *total* など強意形容詞も「常に限定」の可能性が高い。一方「常に叙述」としているのは *afraid*, *asleep*, *awake*, であるが接頭辞の *a-* がつく形容詞は「常に叙述」という一般化が成り立つ可能性もあると言える。

次節では以上のこととを確かめるため、コーパス (BNC) を用いることにする。

4. コンピュータ・コーパス (BNC) のデータ

形容詞の限定用法と叙述用法の頻度数を BNC (British National Corpus) を用いて検討するが、対象とする形容詞は上で検討した形容詞に加えて、いずれかの辞書でどちらかの用法のレベルが付いているもの、あるいは文法書でどちらかの用法のみとしている形容詞をいくつか検討することとする。それぞれ用例数が500例を大幅に越える語については、ランダム検索された500例についてのみ検討する。⁽⁶⁾

結果は下の表の通りである。右端に限定用法の場合には検討用例総数内の限定用法のパーセンテージを示し、その内数には、検討した用例のそれぞれの用法を[限定 : 叙述 (総数)]の順でその実数を示す。叙述用法の場合は検討用例総数内の叙述用法のパーセンテージを示し、その内数は限定用法と同じ順序とする。そして、それぞれ、パーセンテージの多い順で上から並べてある。また限定用法の形容詞の下位分類についてはそれぞれの単語の前に2節の分類を参考にして、以下のような記号を付けてある。⁽⁷⁾

(強意の形容詞 : e, 分類的形容詞 : c, 限定詞後要素 : p, 質的形容詞 : q)

	COBUILD	OALD6	LDOCE	BNC % (= 限定 ÷ 総数)
限定用法				
(p) main	det ADJ	only before N	only before N	100% [482 : 0 (25254)] (名詞18を除外)

(p) former	ADJ n	only before N	only before N	100% [444:0 (16973) (名詞56を除外)]
(e) mere	ADJ n	only before N	only before N	100% [493:0 (3332)]
(e) sheer	ADJ n	only before N	only before N	100% [488:0 (2028)] (強意の用法に限定)
(c) cardiac	ADJ n	only before N	only before N	100% [417:0]
(p) chief	ADJ n	only before N	*	100% [448:0 (11371)] (chief among...は除外)
(q) fateful	usu ADJ n	usu before N	*	100% [188:0]
(c) woollen	usu ADJ n	usu before N	only before N	99.8% [486:1]
(c) atomic	(usu) ADJ n	usu before N	*	99.6% [498:2 (1109)]
(c) wooden	ADJ n	usu before N	*	99.4% [497:3]
(c) countless	ADJ n	usu before N	*	99.2% [614:5]
(e/p) total	usu ADJ n	usu before N	only before N	99.2% [378:3 (17417)] (名詞119例を除外)
(c) rural	ADJ n	usu before N	*	99.0% [495:5 (6258)]
(c) sexual	usu ADJ n	usu before N	*	99.0% [495:5 (6910)]
(c) digital	usu ADJ n	*	*	98.6% [493:7 (1958)]
(c) temporal	ADJ n	*	*	98.5% [541:8]
(c) supplementary	usu ADJ n	*	*	98.2% [491:9]
(c) periodic	usu ADJ n	usu before N	only before N	98.0% [552:11]
(c) additional	usu ADJ n	*	*	98.0% [490:10 (7364)]
(q) grassy	usu ADJ n	*	*	97.8% [305:7]
(q) unenviable	usu ADJ n	*	*	95.3% [81:4]
(q) flagrant	ADJ n	*	*	93.9% [93:6]
(c) silken	usu ADJ n	*	*	93.5% [159:11]
(q) belated	*	*	*	92.2% [165:14]
(q) scant	usu ADJ n	only before N	only before N	92.0% [252:22]
(q) knotty	usu ADJ n	*	*	91.9% [34:3]
(c) silvery	usu ADJ n	*	*	91.2% [229:22]
(q) fleeting	usu ADJ n	usu before N	usu before N	89.7% [330:38]
(q) natty	usu ADJ n	*	*	86.4% [38:6]
(q) paltry	usu ADJ n	usu before N	*	86.0% [98:16]
(q) ramshackle	usu ADJ n	*	*	84.2% [112:21]
(q) peremptory	usu ADJ n	*	*	78.3% [65:18]
(q) peerless	usu ADJ n	*	*	78.1% [25:7]
(q) parsimonious	usu ADJ n	*	*	74.3% [26:9]
(q) perfunctory	usu ADJ n	*	*	73.8% [79:28]

	COBUILD	OALD6	LDOCE	BNC %(=限定÷総数)
叙述用法				
afraid	v link ADJ	not before N	not before N	100% [0:500 (5967)]
awake	v link ADJ	not before N	not before N	100% [0:500 (1412)]
asleep	v link ADJ	not before N	not before N	100% [0:500 (2466)]
thankful	usu v link ADJ	not usually before N	*	95.8% [15:343]
grateful	usu v link ADJ	*	*	93.2% [34:466 (2740)]
bored	usu v link ADJ	*	*	91.3% [40:418(1567)] (動詞42を除外)
seasick	usu v link ADJ	not usually before N	*	89% [4:35]
self-evident	usu v link ADJ	*	*	81.7% [48:214]
aloof	usu v link ADJ	not usually before N	*	79.2% [47:179]
penniless	usu v link ADJ	*	*	70.8% [42:102]
angry	usu v link ADJ	*	*	67.6% [162:338] (4226)]
self-conscious	usu v link ADJ	*	*	50.6% [132:135]

上の表から少なくとも以下の2つのことと言えそうである。

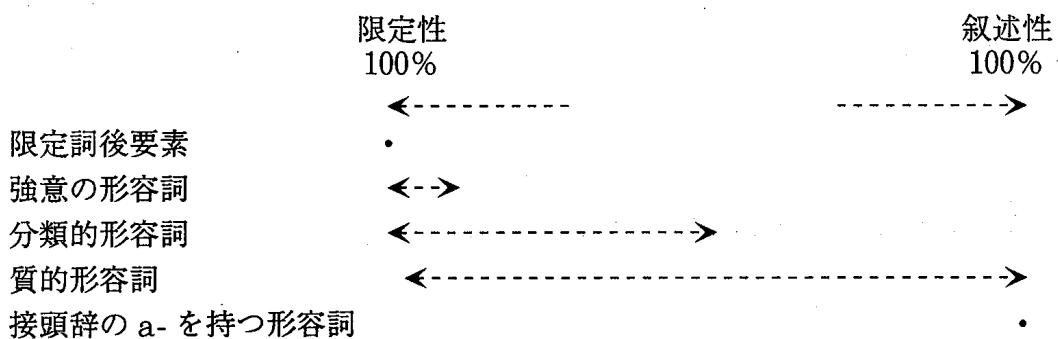
1. 限定用法とされる形容詞、叙述用法とされる形容詞にはそれぞれ段階性が認められ、下位分類ごとにまとまりが見られる。
2. 辞書やいくつかの文法書の記述とBNCのコーパスデータとは一致しない部分が多い。

第1の点すなわち、限定用法あるいは叙述用法とされる形容詞の中にも段階があり、特に限定用法の形容詞の場合には各形容詞の左の下位分類のレベルが示すように、それぞれの下位分類ごとに、大まかではあるが、グループをなしているように思われる。仮にそれぞれの性質を限定性、叙述性と呼ぶなら、限定用法については強調的形容詞やpostdeterminerはほぼ100%といって良いほど最も限定性が強く、その次に分類的形容詞が来て、最後に質的形容詞という緩やかな段階が見られる。ただし、分類的形容詞の場合は差が大きく、上の表のcardiacが100%であるが、ここで取り上げていない分

類的形容詞、たとえば *unmarried* は 584 例中 329 例 (56.3%) が限定用法である。また、ここで取り上げなかった質的形容詞の大部分は一般的に限定用法に制限されることはむしろ少ないと忘れてはならない。

叙述用法については予測通り、接頭辞の *a-* を持つ形容詞が 100% 叙述用法であることがわかったが、それ以外についてはこの調査の対象語数が少ないため一般化は困難である。

以上のことまとめると、以下のように大まかに図示することができよ⁽⁸⁾う。



第 2 点については、3 節で辞書の表示からも推測したように、限定用法のみ、あるいは叙述用法のみの形容詞というのはそれほど多くないことが分かる。具体的に指摘すると *COBUILD* が限定のみとしている形容詞の多くは叙述用法が認められる（例：*countless, flagrant, rural, temporal, wooden*）。*OALD6* については *scant*, *LDOCE* については *total, periodic, scant* のレベルがそれぞれ問題となる。厳密に表示するならそれら全て [usually] を付ける必要があるだろう。また、*COBUILD* が [usually] を付け、BNC でも 100% にかなり近いのにも関わらず、*OALD6, LDOCE* に表示がないもの（例：*digital, supplementary*）も多くある。また叙述用法では、*COBUILD* が *penniless, angry, self-conscious* に [usually v link ADJ] というレベルを付けていたが、70% 程度で [usually] というのは疑問であり、50.6% の *self-conscious* の場合は何かのミスとしか考えられない。

このように、[usually] というレベルについては、3節でも触れたが、注意を要する。たとえば、比率が100%に近い場合は良いとして、[usually] を付ける下の限界はどうなるのか。次節ではこの問題を含むコーパスデータの頻度数をどのように辞書に反映していくかを検討する。

5. コーパスデータの頻度数の扱い

[usually] とは日本語の〔通例〕に対応すると考えられるが、頻度数あるいは比率的に厳密な定義はあるのだろうか。COBUILD の限定用法についての表示の説明をもう一度確認すると、「usu ADJ n The adjective is usually used before a noun. It is sometimes used after a link verb.」であるが、usually も sometimes も曖昧な語であるために、幅の広い解釈が可能である。上で見た BNC の調査に当てはめて [usually] の幅を見てみると、限定用法では perfunctory (73.8% [80 : 27]) から、woollen (99.8% [486 : 1]), 叙述用法では self-conscious (50.6% [132 : 135]) から thankful (95.8% [15 : 343]) となっている。同じように通例限定 [usu ADJ n], 通例叙述 [usu v-link ADJ] となっていても、差がこれだけ大きいことは辞書使用者にとって不都合であるだけでなく、辞書として、言語記述上問題があると言わざるを得ない。〔通例〕という表示についてはより厳密な定義をすべきであろう。

ここまで議論は頻度数の比率（パーセンテージ）を規準にしてきたが、注意すべき事として、パーセンテージだけで判断することの危険性がある。例えば、上の表にある bored (91.3% [40 : 418 (1567)]) という数字から COBUILD のように〔通例叙述〕とすると、「退屈そうな表情」に相当する、bored look, bored expression などとは英語では言わないかのような誤解が生じるが、実際は、BNC ではそれぞれの表現は3例ずつ見られる。これはある単語の全体の頻度数が多い場合にはパーセンテージはあまり重視すべきでないことを示している。したがって、あるコーパスで、ある単語のある語

義に関して制限・叙述のそれぞれの用法の例が一定の頻度数を越えた場合は、たとえ、ある規準のパーセンテージをどちらかの用法が越えていても、[通例限定]あるいは[通例叙述]などと表示すべきではないといえよう。その一定の頻度数とはコーパスの大きさにより、一概に言えないが、例えば bored は単純な比率計算では全体で限定用法が136例に達することになり、この単語について [通例叙述] というような表示は不適切であることは明らかであろう。⁽⁹⁾

最後にコーパスデータの扱いで注意を要する点として、レジスターによる違いがある。Biber et al (1999) では会話、フィクション、ニュース、学術文書に分けて限定用法と叙述用法の違いを検討し、会話では限定用法と叙述用法がほぼ同率であるのに対し、その他は限定用法が叙述用法の3倍から6倍の生起率になっている (p.506)。これが一般的に言えるとすると、今回調査したBNCは会話データが全体の10%であることから、口語と文語のバランスのとれたコーパスよりも、限定用法が大きい数値になっていることが推測される。理想的にはレジスターごとの分析や、口語と文語のバランスを考慮した検討が必要と言える。

6. まとめと今後の課題

本論で明らかになったことをまとめると以下のようになる。まず、形容詞の限定用法・叙述用法は文法家によって様々に分類されているが、限定用法のみの形容詞や叙述用法のみの形容詞を判断する決定的な規準はなく、英語学習者にとって辞書などに頼る他はない。ところが辞書によってその表示に差があり、少なくともBNCのデータに基づくと、問題と思われる表示が多いことが判明した。また、とくに限定用法については下位分類ごとにある程度、段階性が認められた。コーパスデータの扱いについては、[通例]という表示はより厳密な定義をすべきであること、そして、頻度数の比率(パーセンテージ)を規準にすることの危険性、さらにレジスターによる違いを考

慮する必要性を指摘した。

今後の課題としては、第一に、限定用法のみの形容詞や叙述用法のみの形容詞を決定づける規準を追求することがある。また、そもそも限定のみ、叙述のみの形容詞が存在する理由など、根本的な部分を考察の範囲に入れていく必要があるだろう。

第二に、コーパスデータの頻度数の扱いについても根本的な部分から検討すべきと考える。そもそも頻度数の少ない用法とは、非標準的であり、避けられるべきで、別の表現を使うべきということなのか、それとも単にそのような表現を必要とする状況が少ないだけのことか、その状況ではその表現を使うことがむしろ普通なのか。もし後者ならば、単にコーパスデータをもとに「通例云々」とすることは誤解を招くことになると言えよう。冒頭にも述べたが、言語研究においてコンピュータコーパスの利用が一般的になってきて、数量化されたデータが簡単に得られてもそれをどのように解釈し、辞書の記述に反映させるかは緊急を要する問題と言えるだろう。

注

* 本研究は神戸研究学園都市大学交流センター推進協議会共同研究交流助成金を受けている。

(1) Quirk et al (1985) はこの指示物修飾と指示修飾をする形容詞をそれぞれ内在的 (inherent), 非内在的 (non-inherent) 形容詞と名付けている。

(2) コーパスデータで見る限り、このように人が主語になることはまれのようだ。

(3) 安井他 (1976) は Bolinger (1967) を参考にしながら、指示修飾と指示物修飾について、その区別は絶対的ではなく相対的で、典型的には限定用法の構造「形容詞 + 名詞」が指示修飾になるが、形容詞や主要語の名詞によって指示物修飾の要素が出てくるとしている。たとえば (a) は「そのコックは善良だ」という無標で指示物修飾的な意味と同時に「コックとして腕が立つ」という指示修飾の意味も無視できなく、(b) では逆に「コックとして腕が立つ」が指示修飾の意味が無標であるが、「善良なコック」という指示物修飾な意味も無視できないとする。さらに (c) は、指示修飾と指示物修飾がほぼ一致しているとする (p.169)。

a) The cook is good.

b) He is a good cook.

c) the tall/handsome/buxom student

結局のところ指示修飾や指示物修飾を手がかりにして限定用法のみの形容詞を決定することは困難のようである。

(4) 常に限定用法あるいは常に叙述用法の形容詞のみにラベルを付けているかというと、そうとは限らず、[usually before noun] も見られる。

- (5) 例えば wooden の場合は「木製の」という意味に限定して「生氣のない」という意味は除いている。
- (6) また、限定用法と叙述用法の判断が微妙な場合がいくつかあるが、「形容詞+名詞」の形と、 something interesting, のような不定代名詞に後続する場合は限定用法とし、その他は（以下のような例を含め）叙述用法と判断した。
- ...several narrow bridges, some wooden, some stone,
.... a love scene, sexual and passionate,
- (7) 既に論じたが、分類的形容詞か質的形容詞かの判断が微妙なものが多いが、ここで判断のほとんどは Cobuild English Grammar に従った。
- (8) 質的形容詞である fateful は BNC では 100% 限定用法であるが、辞書の表示から判断して 叙述用法が可能と考え、図の中では 100% の位置に質的形容詞を置いていない。また強意形容 詞を 100% としているのは total の用例として His opposition ... is total, や Their commitment was total... のように叙述用法が見られることを踏まえている。さらに言うと、 cardiac の例から考え、分類的形容詞をここでは 100% 限定用法のものがあるとしているが、 2 節の Bolinger の (3) (4) (5) の例のような場合を考慮に入れるならば、 100% の位置をは ずすことも考えられる。
- (9) この危険性を避ける別の方法として、頻度数が多い単語ほど [通例限定], [通例叙述] と いう表示をするパーセンテージの規準を高くしていくことも考えられる。また、このことは 本論文で問題とした形容詞の用法についてだけでなく、頻度数を扱う場合一般について言えることである。たとえば受動態：能動態、单数形：複数形などを単純に比率から判断し、通 例受動態、通例複数形などとすることは危険であり、誤解を招くことがありえる。

参考文献

[一般書目]

- Biber, Conrad & Reppen 1998. *Corpus Linguistics*. Cambridge University Press.
 Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Pearson Education.
 Bolinger, D.L. 1967. 'Adjectives in English: attribution and predication,' *Lingua* 18, pp.1-34.
 Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
 Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
 Sinclair, J. 1990. *Collins Cobuild English Grammar*. Collins. London and Glasgow.
 安井稔・秋山怜・中村捷, 1976. 「形容詞」「現代の英文法」第 7 卷, 研究社。

[辞書文献] ([] 内は用いている略称)

- 『新グローバル英和辞典』第 2 版, 2001, 三省堂。
 『ジニアス英和大辞典』 2001, 大修館。
Collins COBUILD English Language Dictionary for Advanced Learners. 2001. Harper Collins. [COBUILD]
Longman Dictionary of Contemporary English. 1995. Longman. [LDOCE]
Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 2000. OUP. [OALD6]